

## 調査報告

### トロス司教座聖堂出土碑文の概要(三)二〇一二年度の発掘から

師尾晶子

#### キーワード

碑文 スポリア 碑文の部材転用 司教座聖堂 トロス リキア

二〇一二年度の調査では、碑文の発見は、石工のマークと思われる石材に一字ないし二文字のアルファベットのみが刻まれたものをのぞくと数点にとどまった。また、フレスコに描かれたグラフィティ一点が確認されたが、アルファベットのタウ(T)一字にとどまり、内容は不明であった。以下、その概要を報告する。

(一) 南側廊出土の建築部材に転用された記念碑台座  
(156、[図1a](#)および[図1b](#))

現存部分、幅〇・四メートル、奥行〇・三四メートル、高さ〇・二メートルの台座。碑面の現存部分は幅〇・

四五メートル、高さ〇・二メートル。文字の高さは〇・〇〇二五〇・〇〇三メートル。文字はくつきりと深く刻まれ、ていねいにセリフがほどこされている。ほぼ円形のオミクロンとシータ、両端が内側に巻き込む形のオメガが用いられ、イプシロン、エータ、シータなどの水平線は、垂直線あるいは円からはなれて短めに刻まれている。水平線がくさび形に曲がったアルファ(A)、左右の垂直線の長さが等しいパイ(Π)が用いられている。字体から一〇二世紀の碑文と推測される。

上端は、上部の形状から、また文字まで二センチメートルほど空白があることからモニメントの建立当時の端が

残されていると思われる。左端についても、上部の形状から、また現存の五行のうち四行の最初の文字の左側が二センチメートル以上あいていることから（五行目は欠損のため不明）、ほぼ端が残されていると考えられる。ただし、一行目がいきなり  $\Pi\Omega\epsilon\iota\mu\eta\tau\tau\omicron\iota\iota$  とはじまることから、現存しない上部から碑文が続いている可能性が高い。現存行の一行あたりの文字数は一〜一三文字である。一、二行目の定型句、および三、四行目のリキア長官（リキアルコス）の名前の復元の可能性から、現存部分について、本来は一行あたり一五〜一八文字で構成され、台座の幅は〇・七メートル弱であったと推測される。リキア長官として名が刻まれている  $\text{ΑΡΧΙΠΡΩΤΕΥΟΥ ΤΟΥ ΚΑΙΣ ΤΑΣΙΘΕΜΙΔΙΟΣ ΑΤΩΝΑΙ}$ （アポロ…の息子アグリッペイノスまたの名をスタシテミス）が TAM 2. 601 および G15 にそれぞれ父名としてあらわれる人物と同一であるかどうかは現時点では不明である<sup>1</sup>。

上面の形状からも（**図1b**）、現存内容からも顕彰記念碑の台座と推測され、またリキア長官により決議年代（建立年代）が示されていることから、リキア同盟による顕彰碑である可能性が考えられる。

(二) 身廊から出土した碑文断片（4、**図2**）

幅最大〇・二五メートル、高さ〇・二メートル、厚さ最大〇・〇九メートルの三角形に近い碑文の断片で、現存する碑文は五行である。端も背面も欠損している。文字の高さは〇・〇三メートル。整った字体で刻まれており、水平線がくさび形に曲がったアルファ（**A**）、ほぼ円形のオミクロンが用いられている。前出の碑文よりもセリフは控えめであるが、使われている字体はよく似ている。三行目から四行目にかけてセウエルス帝の名が属格形で刻まれているが（ $[\lambda\omicron\upsilon\kappa\iota\omicron\upsilon\sigma\ \Sigma\epsilon\tau\tau\iota\mu\iota\omicron\upsilon\sigma\ \Sigma\epsilon\omicron\upsilon\eta\pi\omicron\upsilon\sigma]$ 、コネクストは必ずしも明らかではない。しかしながら、これより二世紀末から三世紀はじめの碑文である可能性が高いと言える。また、五行目にリキア同盟を示すと思われる **KONON** が読める。リキア同盟による何らかの顕彰碑ないし記念碑の断片である可能性が推測されるが、現存断片からのみでは現状ではこれ以上は不明である。

(三) 南側廊から出土した円形記念碑の断片（160、**図3**）  
 現存部分、幅〇・二八メートル、高さ〇・三三メートル、厚さ〇・二七メートルの建築部材に転用された円形記念碑の断片。碑文の残る面から、もともとは昨年発見された葬礼記念碑とほぼ同様の形状の記念碑であったことが推測さ

トロス司教座聖堂出土碑文の概要(三)二〇一二年度の発掘から(師尾)

れる<sup>(2)</sup>。また、現存部分のカーブの状況から、本来の直径も昨年発見された記念碑とほぼ同じであったと推測される。碑文は右端四行分が現存する。発掘されてまもなく石の保管場所が不明となったため、写真のみからの判断であるが、水平線がくさび形に曲がったアルファ(A)が用いられ、セリフが用いられている。

(四) 身廊出土の建築部材に転用された碑文断片(142、  
図4)

幅〇・四七メートル、高さ〇・二二メートル、厚さ〇・四五メートルの建築部材に転用された碑文断片。碑文建立当初の端は残されていない。判読可能な文字は二行で計五文字にとどまる。これらの文字の刻まれている部分の幅は一五センチメートル程度で、右端に二〇センチメートルほど文字の刻まれていない面が残されている。文字の高さは〇・〇四五〇〇〇五メートルである。大きさなほどのセリフがほどこされておき、その長さは左右ないし上下合わせて三センチメートルを超えることもある。残存文字数の少なさゆえに碑文の性格は不明である。

(五) 身廊から出土した碑文断片(73、図5)

幅〇・〇一一メートル、高さ〇・〇一四メートル、厚さ〇・

〇三五メートルの石片。端、背面とも失われている。碑面全体に碑文が刻まれている。現存部分は四行である。両端が内側に入り込むスタイルのオメガ、丸みを帯びたイプシロン(€)が用いられている。アルファの水平線は直線である(A)。文字の高さは〇・〇二五メートル。字体から、一〜二世紀の碑文と思われるが、内容は不明である。

(六) 身廊から出土した説教壇の欄干と思われる石板の裏に刻まれた碑文(25、図6aおよび図6b。本誌

浦野・深津論文九八頁、写真9-2、および九九頁、  
写真9-4)

説教壇の欄干と思われる石板の裏側の端(碑面の左端中央付近)に三行にわたる文字が読み取れる。石板全体についての記載は、浦野・深津論文九六〜九七頁を参照されたい。石板の大きさは、幅〇・八二メートル、高さ〇・八四メートル、厚さ〇・一〇メートル。文字の高さは〇・〇二五メートル(※は〇・〇三メートル)。碑文の刻まれている面は帯状に五〇センチメートルほど薄く削られているが、左端以外に文字が刻まれていたと思われる痕跡は現状では発見できていない。一行目に両端が入り込むスタイルのオメガ、二行目に中央に水平線の引かれたヒール(※)、三行目におそらくミュー(M)とプシー(Y)が読み取れる。

二行目の✕がデナリウスないしドラクマをあらわす記号なのかどうかは、現存部分からのみではわからない。しかしながら、これらの文字が金額をあらわしており、もともと何らかの寄付金一覧を記したものであったという可能性はありそうである。一〇センチメートル程度という厚さからは建造物の壁面に刻まれた碑文であったとも推測できようが、現状では何とも判断できない。字体からはローマ時代の碑文と考えられ、のちに説教壇の欄干として再利用されたものと推測できる。

(七) 身廊から出土したまぐさ石(リンテル)として再利用された石板に刻まれた碑文(59+59a+59b+59f、図7aおよび図7b。本誌浦野・深津論文一一二頁、写真15-4)

建築部材の正面に刻まれた碑文。石材の形状と用途についての説明は、本誌掲載の浦野・深津論文一〇〇〜一一一頁を参照されたい。

文字の高さは丸みを帯びた文字が〇・〇四メートル、その他の文字が〇・〇四五メートル。水平線がくさび形に曲がったアルファ(A)丸みを帯びたイプシロン(ε)とシグマ(C)、水平線が二本の波線で刻まれたシータとクシーが用いられている。字体の特徴からは五〜六世紀に刻まれ

たものと推測される。この時期に創建された教会聖堂のリンテルないしアーキトレヴに刻まれた碑文の一部と考えられるが、本来の碑文の長さについては不明である。

石材としては+AYZEΣΓAI---と刻まれた59+59a+59bと+のみが刻まれた59fからなるが、AYZEΣΓAI につづいて文字の一部と考えられる垂直線(すなわちイオタ「I」かパイ「Π」かタウ「T」)が刻まれており、59+59a+59bと59fとの間には最低限このアルファベットから始まる語が挿入されるだけのスペースがあったと推測される。

以下の二点は、それぞれ一昨年、昨年に発見されていたものであるが、二〇一二年度の調査により新たな知見を得たものである。

(八) 建築部材に転用された彫像台座(B9-10、図8) 身廊部の瓦礫がすべて除去されたことにより、一昨年の報告(一)の石材の全容が判明した。碑面はこれまでに露出していた部分がすべてであり、新たな情報は得られなかった。ただし、その形状から、彫像台座であったことが明らかとなった。台座の幅〇・六七メートル、奥行き〇・六八メートル、高さ〇・三七メートル。碑面は、幅〇・六六

トロス司教座聖堂出土碑文の概要 (三) 二〇一二年度の発掘から (師尾)

く六七メートル、高さ〇・二六メートル。現存碑文は五行であるが、六行目以下は建築部材に転用されたときに切り離されたと思われる。競技祭の勝者の優勝記念碑であったと推測される。

(九) 北外壁の南面 (内側) の壁材として再利用された碑

文断片 (図9)

④ 昨年の北翼廊の瓦礫の除去によって出現した碑文について、一年間の放置によってモルタルが剥落したことによ<sup>り</sup>、昨年は読めなかったカッパが出現した。碑文の内容、大きさともに不明のままであるが、これにより判読部分は人名の一部である可能性が高くなった。おそらくは [EPMA]KOTOY --- ではないかと推測される。

註

- (1) TAM 2, 601, 4-5: Καλοκαίρις Ἀγριππείνου τοῦ καὶ Στραιβέμδου (トロス 一四〇/一四一年)。TAM 2, 615, 9-10: Αὐξήτικὸς Ἀγριππείνου τοῦ καὶ Στραιβέμδου (トロス、ローマ時代)。
- (2) 拙稿「トロス司教座聖堂出土碑文の概要」(二) 二〇一一年度の発掘から『史苑』七二・二(二〇一二年) 一五六頁。
- (3) 拙稿「二〇一〇年度発掘調査によるトロス教会聖堂出土碑文の概要」『史苑』七一・二(二〇一一年) 一一五〜一一六頁。
- (4) 上掲註2論文、一五八頁、(六)。

(千葉商科大学商経学部教授)



图 1 a



图 1 b

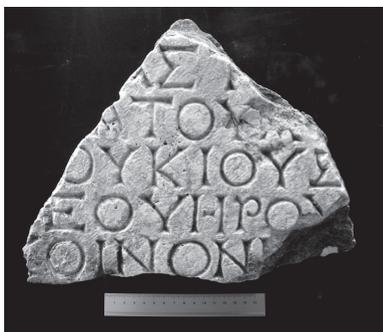


图 2



图 3



图 4

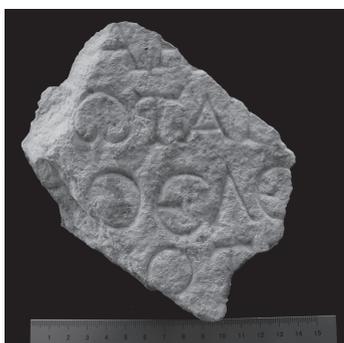


图 5



図 6 a



図 6 b



図 7 a (59 + 59a + 59b)



図 7 b (59f)

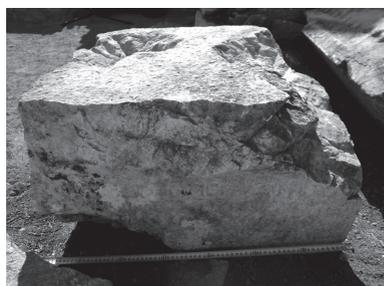


図 8



図 9

## The Basilica Project, 2012: Inscriptions

史苑  
(第七三卷第二号)

MOROO, Akiko

During the summer season of 2012 we found a several inscriptions. All inscriptions but one belong to the Roman imperial period. One inscription engraved on a stone block (probably a lintel) is thought to be dated in the fifth to sixth century A.D. We post a brief description and photographs of these inscriptions.